



Title	帝政ロシア農村における結婚儀礼：「家父長制的社会」の中の若者の儀礼的役割
Author(s)	伊賀上, 菜穂
Citation	大阪大学言語文化学. 1996, 5, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78110
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

帝政ロシア農村における結婚儀礼 －「家父長制的社会」の中の若者の儀礼的役割－*

伊賀上菜穂**

В этой статье я исследовала роль молодежи в свадебных обрядах дореволюционных русских крестьян, для того чтобы понять обрядовую особенность “патриархальных обществ” типа русских крестьян, в которых подчеркивалась власть и большаков, и общины – “мир”. Особенность роли молодежи в том, что значительную роль играют подруги невесты, которые совершают обряды прощания невесты с ее девичеством и подругами, а роль юношей является менее значительной, несмотря на то, что они участвуют в свадебном поезде. Причина этого различия объясняется отношением между их символическим значением и социальным статусом.

Причину необходимости участия девушек при переходе невесты в статус замужней женщины можно найти в их большом символическом значении как “будущих носителей плодородия”. У восточных славян было верование в “мать сыру землю” и сильно сознавалось взаимосвязь между женщинами и плодородием. К тому же, для российской патриархальной власти особенно важно было экономическое руководство, и не надо было сосредоточить право совершения обрядов в руках большаков. Поэтому в руках женщин сохранялись много ролей, связанных с плодородием и девушкам тоже давали роли помощников при переводе невесты как и природы, от ситуации незрелости к зрелости. Еще было важным то,

* Свадебные обряды дореволюционной русской деревни – к вопросу об обрядовой роли молодежи в “патриархальных обществах” – (Naho IGAUE)

** 言語文化研究科博士後期課程

что эта роль не противоречит их социальному статусу: невеста должна стать женой и снохой, как девушка должна стать матерью.

Незначительность роли юношей отражает их низкий социальный статус, который имеет тесное отношение к продолжающейся зависимости жениха от его родителей. В “мире” поддерживалась власть родителей, особенно в браке, поэтому браки заключались родителями и родственниками, а признание брака юношами не имело большого значения, в отличие от обществ, где брак приносил жениху самостоятельность или существовали формальные организации юношей. Вдобавок к этому, их символическое значение “воины” не могло иметь важное значение в месте свадьбы, где ясно проявляется социальное отношение сил.

Можно сказать, что обрядовая роль юношей не была большой даже в русских крестьянских обществах, где было характерно распределение обрядовых ролей. Но чтобы прийти к заключению об особенностях этой роли, нужно большее исследование “игр”, где юноши брали на себя инициативу.

1 研究の目的と対象

ロシア農村の家族、共同体のあり方は、一般に「家父長制（патриархизм）」的と言われる。しばしば「大家族」と表現されるジョイント・ファミリー¹⁾を支配するのは、普通、最年長の男性成員である家長（большак）であり、共同体（ミール）の重要事項も、彼らの寄り合い（сход）で決定される。だがこの共同体は、土地の共同所有と税等の義務の連帯責任をもう一つの特徴としていたため、彼らの「家父長権」への対応は、一見矛盾した様相を呈する。すなわちミール共同体は、家庭内倫理に関しては過剰なまでに家父長権を尊重する傾向にあったが、同じ家庭問題でも、共同体の経済全体に影響を与える家政の破綻や、その引き金

¹⁾複数の夫婦を含み、直系的、傍系的な拡大が見られる家族形態。ミッテラウアー[15]pp.100-103 参照。

になりうる家族分割に関しては、家長の決定権に制限を加えるばかりか、家長の交替を要求することさえあったのである。²⁾

農村社会のこのような多面性は、経済や政治面での家父長権の限界として、既に多くの指摘がなされてきた。³⁾ 儀礼面に関しても、例えばトゥーリツェヴァが、農耕儀礼の集団的（共同体的）性格を挙げているが、⁴⁾ 農村の社会構造と儀礼体系の関係を理解するには、家族内儀礼と共同体的儀礼の関係や、性別、年齢別の儀礼の分担方法などを、さらに詳しく見ていく必要がある。

この目的に対する一つの足がかりとして、本論文では、若者、つまり未婚の男女が、結婚儀礼の中で果たす役割に注目した。⁵⁾ 19世紀後半から20世紀にかけてのロシア農村では、男女とも20歳前後で結婚したために、「若者時代」が各人のライフサイクルに占める割合が小さい。⁶⁾ そのため、結婚年齢が高く、独身時代が人生の特徴的な一段階となっていた中欧や西欧ほどには、その社会的位置づけが研究されてこなかった。⁷⁾ ミッテラウアーは「そもそも若者をこの二つの地帯で同

²⁾Glickman[11]pp.326-330、Worobec[13] pp.45-46 参照。

³⁾制限された *большак* 権は、無制限という家父長権の一般的イメージとは相入れないが、しかし、もっとも精緻と言われるマックス・ウェーバーの家父長制理論から、はずれるものではない。彼は家父長制的支配を成り立たせる根本要素として、「1.伝統の神聖性、権威に対する恭順と、2.支配者の個人的人格に対する恭順」（鎌田浩「家父長制の理論」（『家と家父長制』早稲田大学出版部、1992）p.20）を挙げているが、これは、無制限かのように言われてきた家父長権も、実際には伝統的権威を超えられず、家や地域共同体の経済・政治的、倫理的制約を被ることを意味している。ウェーバー『支配の社会学Ⅰ』（世良志郎訳、創文社、1956）参照。

⁴⁾Тульцева[6] pp.45-63 参照。

⁵⁾本論文で「若者」という語を用いる場合、性別の区別はしていない。性別の区別が必要なときは、「青年」「娘」とする。また結婚儀礼の参加者としての「青年」「娘」は、それぞれ花婿の任意の男の友人、花嫁の任意の女の友人のことであり、花嫁花婿の地縁の同年齢グループとはほぼ一致する。

⁶⁾「早婚」が奨励されるのは、嫁とりによる労働力の確保とそれに伴う分与地の確保、そして高い乳幼児死亡率を補うために出産のチャンスを増やすためであるが、しかしこれは、ジョイント・ファミリーが、経済力のない若い夫婦を扶養することができたために可能となった慣行であった。ロシアの「早婚」の伝統については、詳しくは Верштан[2] pp.48-50 参照。工業化前（18世紀）の西ヨーロッパの結婚平均年齢は、女性が25歳またはそれ以上、男性は27歳かそれ以上である。Hajnal, J., "European Marriage Patterns in Perspective" (*Population in History*, London, Edward Arnold, 1965) pp.106-113 参照。

⁷⁾勿論、彼らは無視されてきた訳ではなく、たとえば Верштан[2]は、各年齢集団の儀礼的役割について説明しており、Worobec[13]は、家族及びミール内での若者の経済的・法的位置づけについて詳しく述べている。

じように一定の生活段階ととらえることが可能なのか⁸⁾と問うているが、まさにそこに、ロシアの若者の特徴を追究する意義を求めることができよう。本論文でとりあげる結婚儀礼は、家族儀礼でありながら共同体儀礼の色合いが強いため、家族原理と共同体原理の関係を見るのに適している。このような場における若者の役割を観察し、その特徴を儀礼的領域と社会的領域という2つの視点から探ることで、ロシア農村社会が彼らに与えた意味が、浮かび上がってくるであろう。

研究対象は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての、ロシア帝国ヨーロッパ部のロシア人農民である。彼らの結婚儀礼における若者の役割の特徴は、娘たちの役割が大きく、青年たちの役割が比較的小さいことである。このような特徴が形成された背景を、結婚儀礼の他の参加者や、結婚儀礼以外の場における若者の役割、そして青年たちの役割が大きと言われるドイツやフランス、そして日本と比較しながら考察していく。

2 東スラヴの結婚儀礼の一般的特徴

ロシア、あるいは東スラヴの結婚儀礼は、一般に次のような順序で行われる。

● 結婚式前の儀礼（предсвадебные обряды）

花婿側による結婚の申込→双方の親族の話し合い及び食事→結婚式の準備
→花嫁と女友達の別れの儀礼（デヴィーチニク *девичник*）

● 結婚式（свадьба）当日

- － 〈花嫁宅〉花婿が花嫁の家に来る。花嫁側が儀礼的に妨害する→花嫁の引き渡し（略奪婚、売買婚の儀礼が伴う）→教会へ出発
- － 《教会結婚式》（*венчание*: ウクライナでは *свадьба*（民間結婚式）の中に組み込まれず、別々に行われる）この前後に花嫁の髪型を変える儀礼。
- － 〈花婿宅〉花婿の家への花嫁の迎え入れ→宴会（時に床入り儀礼で中断）→床入り儀礼

⁸ ミッテラウアー[15]p.134.

● 結婚式後の儀礼（послесвадебные обряды）

新婚夫婦（及び婚礼の客）による花嫁の実家の訪問。

謝肉祭（масленица）や夏に行われる新婚夫婦を対象にした遊び（など）。

このような流れは、他のヨーロッパ地域にも見られるが、とはいえ、東スラヴの中でも様々な地域差があり、南から北にいくにつれ、結婚儀礼は、古い形をよく残したのから独自の発展を遂げたものへ変化する。これは典型的には、ウクライナにおける教会結婚式の意味の小ささ、北ロシアの魔法使いと泣き歌の重要性に現れているが、この違いはさらに、儀礼のもとの意味がよく保持されているウクライナでは、個々の儀礼の独立性が強いのに対し、ロシアでは個々の儀礼の独立性よりも、全体としての別れのドラマが強調される、という違いも生んでいる。⁹⁾ このような地域差は参加者の役割にも影響を与えているが、まずは、娘、青年、そして親族¹⁰⁾ がどのような役割を担っているのかを見ていくことにする。

3 参加者の役割

東スラヴの結婚儀礼における娘たちの役割は、結婚儀礼前半に集中しており、婚礼行列が花嫁宅を離れると同時に、彼女たちの出番はなくなる。彼女たちの主な役割は、1.花嫁の結婚の準備の手伝い、2.デヴィーチニクの実施、3.叙情歌や祝い歌などを歌う、4.泣き歌を歌う、の4点である。このうち4の泣き歌は、この地域ではほとんどロシアにしか見られない。¹¹⁾ 泣き歌は、結婚を嫌がる気持ち、別れを悲しむ気持ちを歌ったもので、基本的に花嫁と娘たちが歌うが、花嫁の訴えに答えるという形で、母親や女性親族も参加する。北ロシアでは泣き女が雇われる

⁹⁾Зеленин [4]pp.332-333, 342-343、Чижикова [7]pp.181-182、Чистов [9]pp.402,406-409 参照。

¹⁰⁾親族とは、血縁や姻戚関係にある者のことだが、ロシアの場合、あまり遠縁の者は含まれない。また花嫁の兄弟以外（彼は父親代理として、常に親族の立場にある）の兄弟姉妹は、親族と若者の両面を持つが、若者としては、他の者より重要な役割を与えられることが多い（花嫁の妹が *девичник* で花嫁の側に座ったり、花婿の兄弟が *дружка*（後述）を務めたりする）。ヴォログダ県コクシェニガ、ウフチューガ地方では、花嫁は結婚式前には、花婿の姉妹にさえ、他の娘や女性客と同じように結婚の辛さを訴えるが、花婿宅に迎え入れられた後は、親族として接する。Балашов 他[1]pp.101,295,296 参照。

¹¹⁾葬式の泣き歌は、多くの地域で見られるが、発達した結婚の泣き歌が見られるのは、ヨーロッパではロシアとフィン＝ウゴル語系の言語を話す民族の一部だけである。Чистов[8]pp.101-114 参照。

ことが多いが、これは泣き歌が高度に発達したためにおこった、比較的後期の現象と考えられる。¹²⁾ 娘たちは花嫁に伴唱したり、花嫁の訴えに答えたりする他に、花嫁のかわりに歌うことも多い。泣き歌は「泣き（плач）」「叫び（воп）」とも呼ばれるが、実際に花嫁は泣いたり叫んだりし、さらに何度も地面に体をおつけるように倒れるなど、激しい行為を行うことも多い。泣き歌の発達した地域では、この激しさは花嫁の儀礼的な死に帰着する（実際に気絶、または意識的に倒れこんで動かなくなった後、死者のように全身を布で覆われる¹³⁾）ので、泣き歌は、通過儀礼に特有の死と再生の儀礼（娘としての死と既婚女性としての再生）であるといえよう。¹⁴⁾ 2のデヴィーチニクは、娘たちの儀礼の代表だが、その内容は、北から南にいくにつれて変化する。泣き歌の発達しているロシアでは、デヴィーチニクも発達しており、泣き歌そのものの他にも、風呂の儀礼（娘たちが泣き歌を歌いながら花嫁を洗う）や「美しさ（красота）配り」（リボンなど娘時代を象徴するものを、妹や女友達に配る）などが含まれ、悲愴な雰囲気醸し出しているが、ウクライナ（ここでは *вечерини* と言う）では、花婿と青年たちも含んだ陽気なパーティーになっていることが多い。¹⁵⁾

次に青年たちであるが、彼らの主たる役割は、花嫁獲得を手助けする親兵になること、つまり、花婿の親族とともに婚礼行列に加わることである。しかし親族とは異なり、何らかの名前のついた特別の役を受け持つことは少ない。¹⁶⁾ また東スラヴでは、有限の花嫁資源を相争うという、花婿と青年たちのライバル関係を表した儀礼がほとんど見られず、彼らの協力関係が目立つ。¹⁷⁾ また時に、娘たちのデヴィーチニクと対応するものとして、*мальчишник* という言葉があげられるが、その分布は非常に限られており、また飲み会以上のものではないので、主要な役割とはいえない。¹⁸⁾ 青年たちの役割は、その重要度には差があるものの、娘

¹²⁾ Вернштам[3]pp.94-97 参照。

¹³⁾ Вернштам[3]pp.83-84 参照。

¹⁴⁾ 花嫁の「娘時代」や「美しさ」を葬るイメージは、泣き歌や叙情歌にしばしば現れる。

¹⁵⁾ Чистов[9] p.405, Валашов 他[1]p.46 参照。

¹⁶⁾ ただし、花婿が「公こう князь」と呼ばれるのに対応して、親族も含めた婚礼行列全体は「貴族 *бояре*」, 「(公の) 親兵 *дружины*」と呼ばれる。

¹⁷⁾ ライバル関係が表れたものとしては、ウクライナのドン地方に残っている *околишня* という儀礼（青年たちが結婚式の邪魔をすると脅して、花婿から酒や金などをもらう）がある。Критска-Иванова, Е.Ф. Типология и эволюция русского свадебного обряда и фольклора в Болгарии (в кн.: Русские, Наука, М., 1989) pp.200-202, 205 参照。

¹⁸⁾ Вернштам[2]p.93 参照。

たちに較べると地域差は小さいといえよう。

最後に親族であるが、彼らは結婚儀礼のあらゆる場面に登場し、参加者の中でもっとも大きな役割を果たす。結婚式前に行われる種々の話し合いには、双方の親族の出席が不可欠だが、特に結婚式当日は、*дружка*、*сваха*、*сват*、*тысяцкий*などの重要な役割をうけもつ。このうち結婚式の総指揮をとるのが、花婿側の *дружка* (男性) と花嫁側の *сваха* (女性) である。*дружка* や仲人は難しい役割であるため、親族以外の者が務めることも多かったようだが、基本的に親族の役割と考えて良いだろう。

結婚式当日の若者と親族の役割を比較すると、次のようになる。まず花婿側だが、地域差はあるものの、全般的に、集団で花婿の装飾となっているとも受けとめられる青年たちよりも、それぞれが重要な役割を担っている親族の方がより重要であるといえる。これに対し花嫁側は地域差が大きく、南ロシア、ウクライナでは、親族同士の対立 (の演出) が顕著で娘たちの影が薄いのに対し、北ロシアでは、花嫁側の親族は花婿側に対し、抵抗らしい抵抗をしない。かわりに抵抗するのは花嫁と娘たちである。中央ロシアは2つの型の中間に位置し、両者が適度に抵抗することが多い。

このようなことから、東スラヴの中でも、ロシア、特に北ロシアでは、娘たちの役割が大きく見え、逆に青年たちの役割は、親族たちの活躍の陰に隠れがちであることが分かる。

4 若者の役割の特徴

以上、参加者の役割を見てきたが、ロシアの娘たちは、ドイツやフランス、あるいは日本と比較しても、その役割が大きい。ドイツやフランスの結婚儀礼の記述では、ロシアのデヴィーチニクのように、娘たちに重点がおかれる儀礼はほとんどなく、娘たちが単独で登場することも少ない。史料に現れるのは、道を塞いだり銃を撃ち鳴らしたりする「若者」たちであり、それは多くの場合青年たちのことである。しかし、結婚式の後半には登場しないことから分かるように、ロシアの娘たちの役割は、絶対的に大きいわけではない。彼女たちの役割を更に際立たせているのは、青年たちの役割の小ささである。

4.1 娘たちの重要性とその要因

ロシアの娘たちの役割が大きいのは、第一に、デヴィーチニクに代表されるような、花嫁と娘時代および娘たちとの別れを強調する儀礼が多いため、第二に彼女たちが結婚儀礼に不可欠の歌い手であるためである。娘たちは、泣き歌、叙情歌、祝い歌、罵り歌など様々な歌を歌うことによって、花嫁と生家、親族、村などの別れをサポートしたり、結婚式の場面転換や、進行具合を示したりする。特に前述した泣き歌の場合は、彼女たちは花嫁の死と再生の儀礼を司る司祭だとさえいえる。

このような花嫁と娘たちの絆の強調、あるいは、花嫁の「娘」という立場の強調が、花嫁の「既婚女性」への移行を強調するための演出であるのは間違いない。つまり、式の後半で花嫁が「娘」から「既婚女性=母」のカテゴリーへ移ったことを強調するために、先に式の前半で花嫁の「娘」カテゴリーへの帰属を強調しておく必要があるのだ。花嫁と娘たちの分離は、他の地域でも何らかの形で示されるが、ロシアのように、実際に娘たちが大きく関わり、かつ彼女たちとの完全な分離が演出される地域は、多くはない。¹⁹⁾ 花嫁の体験する多くのカテゴリー移行（実子から義理の娘、嫁、妻への移行、別の家族、共同体への移行など）の中で、年齢集団としての「娘」からの移行が特に重要なものとして選択されているのは、ロシアにおいて彼女たちが、何らかの無視し得ない大きい意味を持っているからと考えられる。だが、ロシアにおける娘たちの社会的地位は低いため、彼女たちに付与された意味が社会的領域に根ざしたものでないのは明かだ。その意味は、象徴体系の中に求めるべきである。

娘たちの象徴的意味としてまず観察されるのは、「未来の豊饒性の担い手」という役割である。東スラヴでは、自然を人間のライフサイクルに比してとらえる考え方が、よく保持されており、儀礼、特に農耕儀礼は、それを行うのに最適と考えられている者の手で行われる。²⁰⁾ その上この地域では、「母なる大地」信仰に見られるように、女性と豊饒性の結びつきが強く意識されていたため、女性は豊饒性

¹⁹⁾ ヴァン＝ジェネップは、花嫁と娘集団の分離をよく表しているものとして、バシキール人と、シナイ半島のアラブ人の儀礼を挙げている。ヴァン＝ジェネップ『通過儀礼』（秋山さと子、彌永信美訳、思索社、1977）pp.131-132, 136-137 参照。

²⁰⁾ たとえば穀類の播き初め儀礼は男性が、刈初め儀礼は既婚女性が行うが、播種、刈り入れ（小型の鎌 серп による）自体もそれぞれ、基本的に男性、女性の仕事とされている。また既婚女性の刈初め儀礼は、娘たちの春夏の儀礼（註 22 参照）と対称をなしている。Вернштам[2]pp.133-159, 172-183 参照。

及び生命に関することによく関わり、人や自然の移行を助ける「渡し守」の役割をになってきた。²¹⁾ よって誕生には産婆が、死には泣き女が必要なように、人や自然の「未成熟」から「成熟した」状態への移行には、「未来の豊饒性の担い手」である娘たちが必要であり、それは彼女たちの団結と分離の形で表されてきたのである。²²⁾

ロシアではこのような考え方が、泣き歌の伝統によってさらに強化された形で提示されるのに対し、ウクライナでは、もともと親族の役割が大きい上に、別れの色彩が弱く、泣き歌もないので、娘たちの役割がロシアに比べて小さくなっている。この違いは、ロシアでは花嫁個人の地位の変化が強調されるのに対し、ウクライナでは親族間の関係がより強調される傾向にあることに起因しているといえよう。

4.2 青年たちの役割とその社会的背景

次に青年たちであるが、花嫁獲得のための親兵として婚礼行列に加わることで自体は、非常に大きな役割である。それにもかかわらず、青年たちの役割が小さく見えるのは、1.親族など、他の参加者の役割が大きい、2.青年たちの承認が実際には大きな意味を持っていない、3.花婿と青年たちのライバル関係や別れを表す儀礼など、青年レベルでの儀礼が少ないためである。他の地域の例をあげれば、2に関しては、日本のある地域では、若者組の結婚承認が親や親族の承認に優先したり同様の重要性を持ったりすることがあり、²³⁾ またこれほどではないが、フランスやドイツの青年と花婿の集いも、仲間うちでの結婚承認の場であった。²⁴⁾

²¹⁾ 東スラヴにおける女性と豊饒性の関係については、Hubbs[12]参照。

²²⁾ セミーク、トロイツァ（復活大祭後第7週目の木曜日と復活大祭50日目。晩春から初夏にあたる）に行われる娘たちの有名な儀礼に、白樺の枝を編むことで教母関係、つまり義姉妹関係を結び、数日後に枝を解くことでこの関係を解消するというものがある。Соколоваはこれを、娘たちが結婚可能な年齢へ達したことを示す一種のイニシエーションと考えているが、この中では明らかに自然の移行期と娘たちの移行が重ね合わされている。Соколова[5] pp.188-213 参照。

²³⁾ 瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』（未来社、1972）pp.277-282, 315-319, 327-328 参照。

²⁴⁾ フランスの結婚儀礼については、A.ビュルギエール「フランスにおける結婚儀礼 — 教会の慣習と民衆の慣習（16-18世紀） —」（長谷川輝夫訳、『家の歴史社会学』新評論、1983, pp.235-257）、N.ベルモン「結婚の民衆儀礼における婚礼行列の象徴機能」（長谷川輝夫訳、同『家の歴史社会学』, pp.259-270）、E.ショーター『近代家族の形成』（田中俊宏他訳、昭和堂、1987）pp.226-228 参照。ドイツの結婚儀礼については、谷口幸夫「結婚の民俗 —

3の青年レベルでの儀礼は、青年たちの承認儀礼が娯楽化したものと考えられるが、典型的なものとしては、青年たちが花婿に酒を無理矢理おごらせたり、教会から戻る花婿を殴ったり、または床入りの時に、若者たちが花嫁、花婿を部屋から引きずり出して、村中連れ回すといったものがある。これらは、若者組の存在または伝統で説明されることが多いが、確かにロシアには若者組がなかった。²⁵⁾

ロシアで親族の役割が大きく、青年たちの承認の意味が小さい理由は、「大家族」制のもとで、花婿が結婚を機に両親から独立しないことに求められる。²⁶⁾ロシアでは、ドイツやフランスとは異なり、青年は必ずしも未来の戸主ではない。経済的に独立しないまま、ジョイント・ファミリーに組み込まれる彼らは、結婚後も父や兄、オジに従属する。このような背景のもと、ロシアでは子に対する親の支配力が大きい²⁷⁾ 特に結婚に関しては、早婚の伝統もあって親の決定権が強力であった。農奴解放後は状況も変わってきたが、それ以前は花婿は親と親族の決定に従わねばならず、よって花嫁も、花婿自身というより彼の家族や親族に統合されるものだった。このような花婿の独立性の低さは、青年たち全体にもあてはまる。家長権が強く支持されるミールの中で、若者の社会的地位は低く、そのため結婚儀礼の中での彼らの承認の重要性も低かったのである。ロシアに若者組がないのも、おそらくこの青年たちの社会的地位の低さに由来する。

花婿が独立するようになると、青年たちの役割も大きくなるという史料が、西フィンランドにある。²⁸⁾ この地域は以前はジョイント・ファミリーが優勢で、結婚儀礼もロシアのように親族中心のものであったが、スウェーデンの影響で核家

ドイツの民俗を通して見た —」(『広島大学文学部紀要』No.37, 1977, 326-346) 参照。

²⁵⁾ 「若者組」は、学術用語として定着しているので、青年組織の意味で用いている。フランスでは中世末期に宗教団体である *confrérie* と、軍隊組織にならった自警団の *guet* の、2つの青年組織が発達し、後には祭やシャリヴァリなどを行う集まりになっていった(同上ショーター pp.216-217 参照)。ドイツでは、ゲルマン古代のジッベ制にさかのぼるともいわれる若者組の伝統(*Burschenschaft*)が、20世紀まで保持された。江守五夫『日本の婚姻 — その歴史と民俗 —』(弘文堂、1986) pp.359, 397 参照。ウクライナにも「*молодіжні громади*」(若者の共同体)という集団がある。なおロシアには、既婚男性全体の組織もない。Верштам[2]p.92 参照。

²⁶⁾ 註6を参照のこと。

²⁷⁾ 親に逆らう子供(成人、嫁を含む)に対する、ミールや郷会の厳しい処罰については、Минх, А. Н. Народные обычаи, обряды, суеверия, и предрассудки крестьян Саратовской губернии (Записки императорского русского географического общества по отделению этнографии, т.19, вып.2, 1890) p.120, Worobec[13]p.212-214, 同[14]pp.200-201、肥前栄一『ドイツとロシア — 比較社会経済史の一領域 —』(未来社、1986) p.292 参照。

²⁸⁾ Шлыгина[10] p.103-113。以下参照。

族が優勢になり、花婿が結婚を機に独立するようになると、花嫁を花婿側へ統合する儀礼がなくなり、かわりに、花婿花嫁二人の新しい家族を披露する儀礼が生まれた。また親族の役割が小さくなり、若者たちの役割が大きくなっていった。

今回観察した時期のロシアにも、このような変化の兆しは見られる。この時期には、農奴解放、産業革命の影響により、儀礼の簡略化、娯楽化が急速に進んだが、この変化の中で、娯楽を担う青年たちの参加の割合が大きくなり、儀礼的役割の場を失った親族、娘たちの役割が縮小していく傾向が見られる。

4.3 結論

以上から、ロシアの結婚儀礼における若者の役割を規定しているのは、娘たちの持つ象徴的意味の大きさと、青年たちの社会的地位の低さであると言うことができるが、この違いは、現実の社会関係が、彼らの持つ象徴的意味に与える影響の違いで説明できる。

娘たちがその低い社会的地位にもかかわらず、重要な象徴的意味を持続けたのは、キリスト教が、彼女達の象徴的力の源である「異教」的要素を、完全に禁止または吸収できなかったことと、密接に関係している。農民の世界観の重要な部分を占めながらも、二流というレッテルを貼られた女性たちの儀礼は、より公的な立場にあった男性たちに奪われることも、逆に無視されることもなく、女性たちの手に留まった。だが、花嫁と娘時代の別れの儀礼が、彼女たちの社会的地位と矛盾しなかったということも、これに劣らず重要である。これらの儀礼は、それがどんなに反抗的に見えようとも、結局は、結婚は義務で娘にとどまることは罪であるという、共同体倫理の再確認の場となり得たため、彼女たちの儀礼前半での役割をさらに大きくしたのである。

これに対し青年たちのもつ「兵士」という意味²⁹⁾は、法的領域に触れるため、現実の社会と離れた存在ではありえない。したがって社会の中で家族、親族的要素が重視される限り、結婚儀礼という現実社会の力関係が色濃く現れる場所では、彼らは兵士は兵士でも、「公^{こう}」である花婿を直接助ける「親兵」ではありえず、花婿後見人である親族たちの「お供」になってしまうのである。

²⁹ ロシアでは、青年（または男性）を指す名前に、некрут、рекрут、воин、люб など、兵士を思わせるものがある。これは、男性が軍事的機能を担っていた時代の名残と考えられる。Вернштам[2]pp.31-33 参照。

5 最後に「儀礼的役割分担」に関して—

ロシア農村型「家父長制」的社会の儀礼的特徴としては、労働と同じように役割分担がかなり徹底しており、家父長や男性に、儀礼執行権が集中していないことが挙げられる。³⁰⁾ 何よりもまず経済共同体であったミール及びジョイント・ファミリーは、祖先崇拜を中心とした「家」意識や男系子孫の結束が比較的弱く、³¹⁾ よって、男性に重要な儀礼を集中させる必要性が小さかった。これは、経済統率力が強調された家父長権にもあてはまり、家父長は家族を代表する儀礼、特に公のロシア正教の儀礼を担うにとどまった。そのため前述したように、豊饒性や生死に関する儀礼の多くが、女性の手に残り、娘たちもまた、その低い社会的地位の影響を受けながらも、「未来の豊饒性の担い手」の役割を果たしてきた。

しかし青年の儀礼的役割を見定めるのは、難しい。確かに農耕儀礼や家族儀礼の中では、象徴的意味が十分発揮できないため、彼らの儀礼的役割は相対的に小さい。だが彼らは多くの儀礼的な場に、「遊び」あるいは娯楽の担い手として登場する。これを観察すると、彼らは遊びによって儀礼を活性化させる「触媒」の役目をもっているように思われるが、「遊び」の中にはあまりにも多くの要素が混入するため、分析は容易ではない。これについては、さらなる考察が必要であろう。

主要参考文献

1. Балашов, Д. М., Марченко, Ю. И., Калмыкова, Н. И. Русская свадьба: свадебный обряд на Верхней и Средней Кокшеньге и на Уфтыге. Современник, Москва, 1985.
2. Бернштам, Т. А. Молодежь: в обрядовой жизни русской общины XIX—начала XX в. Наука, Ленинград, 1988.
3. Бернштам, Т. А. Свадебный плач в обрядовой культуре восточных славян (XIX—начало XX в.). —В кн.: Русский север. Наука, Ленинград, 1986.

³⁰⁾ これは1章で述べた Тульцева の考えと、ほぼ共通する。

³¹⁾ あきらかに祖霊祭祀であるセルビアのスラヴァ祭は、もっぱら男性成員の手に委ねられていた。ミッテラウアー[15] pp.24, 129–132 参照。

4. Зеленин, Д. К. (Цивина, К. Д. пер.) Восточнославянская этнография, Наука, Москва, 1991.
5. Соколова, В. К. Весенне-летние календарные обряды русских, украинцев, и белорусов XIX-начало XX в. Наука, Москва, 1979.
6. Тульцева, Л. А. Община и аграрная обрядность рязанских крестьян на рубеже XIX-XX вв. —В кн.: Русские. Наука, Москва, 1989.
7. Чижикова, Л. Н. Свадебная обрядность сельского населения курской губернии в XIX- начале XX в. —В кн.: Русские. Наука, Москва, 1989.
8. Чистов, К. В. Причитания у славянских и финно-угорских народов. —В кн.: Обряды и обрядовый фольклор. Наука, Москва, 1982.
9. Чистов, К. В. Семейные обряды и обрядовый фольклор. —В кн.: Этнография восточных славян. Москва, Наука, 1987.
10. Шлыгина, Н. В. Свадебная обрядность прибалтийско-финских народов в конце XIX-начале XX в. —Советская Этнография, 1991, вып. 2.
11. Glickman, R.L., "Women and the Peasant Commune," in *Land Commune and Peasant Community in Russia* (London, Macmillan, 1990).
12. Hubbs, J., *Mother Russia: The Feminine Myth in Russian Culture* (Indianapolis, Indiana UP, 1988).
13. Worobec, C.D., *Peasant Russia: Family and Community in the Post Emancipation Period* (Princeton, Princeton UP, 1991).
14. Worobec, C.D., "Victim or Actors? : Russian Peasant Women and Patriarchy," in *Peasant Economy, Culture, and Politics of European Russia, 1800-1921* (Princeton, Princeton UP, 1991).

15. M.ミッテラウアー著, 若尾祐司他訳『歴史人類学の家族研究 — ヨーロッパ比較家族史の課題と方法 — 』新曜社, 1994.